

Title	W・スターク著 杉山忠平訳 経済学の哲学的基礎
Sub Title	The ideal foundations of economic thought, by W. Stark
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.3 (1961. 3) ,p.224(66)- 230(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19610301-0066
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610301-0066">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610301-0066</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ア階級の社会が色濃く彼の思想に投影した結果である以上、アダム・スミスがとくに「イデオロギー的にゆがめられていない」とするには論証が稀薄ではなからうか。

以上において筆者は、この野心的な労作のなかで、理解しえた限りにおいて著者のいわんとするところを紹介し、筆者の考えものべてみた。哲学的知識に乏しい筆者にとっては、第三章および第四章は非常に難解で、従ってほとんどふれずにこの拙ない書評を終らなければならぬことは、その非才の致すところとして読者諸子にお詫びしなければならぬ。杉山助教授の邦訳は、さすがに著者の指導をうけられただけに、訳業も綿密で、非常に読み易く、このすぐれた労作を完全に把握されている自信のほどが、行間に漲っている名訳であると思う。心から敬意を表する次第である。ただ筆者が気づいたことで、ひとつ指摘させていただくならば、ときどき句点のない長い文章がつづくことがある。あまり句読点が多いのも困るが、やはり、「は」とか「が」の助詞で主部がされる場合は、かりにその主部がどんなに短かくとも、そこで句点をつけることが望ましいと思う。そうでないと述部が長かった場合に、読んでいて意味がとりにくくなることも少なくない。たとえば、一二四頁の二行目からはじまり六行目で終る一節がそれで、いままじ句点があったほうが読み易くなるのではないかと思う。

しかしこれは些細なこと、むしろこのすぐれた著作を、著者が日本版の序文にのべているように杉山氏の訳業によって、われわれ

が読むことができるのはまことに幸というべきである。本書を読むことによって、ひとは経済思想史への新しい眼が開かれることと思ふ。(ミネルツァ書房、一九六〇・五・二〇・四七〇円)

——一九六一・一・一一—— (飯田 鼎)

W・スターク著  
杉山忠平訳

『経済学の哲学的基礎』

(W. Stark: The Ideal Foundations of Economic Thought, Three Essays on the Philosophy of Economics.)

一

K. Mannheim 編集による International Library of Sociology and Social Reconstruction の一冊として、この書が出版されたのは、一九四三年のことであって、三田学会雑誌上にはすでに服部成三郎氏による紹介(四五巻一二号)があり、私も何度かこの書に触れたことがある。だが著者スタークは、近年ベンサム、サン・シモン、モンテスキューなどについての労作をつぎつぎと発表し、知識社会学についての興味ある著書を発表するなど、まことに注目にあたいる研究活動を進めているので、四版を重ねたこの代

表的な著作を、杉山忠平氏の綿密な翻訳を得たのを機会に、再び取り上げることも無意味ではなからう。

W・スタークは、この書において、近代経済思想の背後にある社会哲学、すなわち、政治経済学という科学がそこから始まり、そこへ帰っていくような一群の社会理念、理想を対象としている。従って、これは経済分析の歴史ではなく、その背後にあってこれを規制する思想の歴史であり、これを彼は、経済学がそれを通して発展した決定的な段階の一つ一つを、それぞれ取り扱った三つの論文において素描している。そして彼は、そこに示した三対の思想家が、いわばそれぞれの段階の信条を要約すると考えた。すなわち、

古典経済学の哲学的基礎

- 一、大反定立Ⅱ自然と人間 (J・ロック)
  - 二、大総合Ⅱ神的秩序 (G・W・ライブニッツ)
- 古典経済学の終末、岐路に立つ自由主義と社会主義

- 一、自由主義のみちⅡトマス・ホジスキ
- 二、平等主義のみちⅡウィリアム・トムソン

近代経済学の科学的基礎

- 一、古い社会哲学の消滅 (R・ゴッセン)
- 二、古い社会理想の解体 (R・ジェニングズ)

このような構成を取った理由は、ロックとライブニッツは古典経済学の哲学者であり、ゴッセンとジェニングズは近代理論の先駆者であり、トムソン及びホジスキンの思想において、古典経済学から

近代理論へとみちびいた大きな危機が、最も明瞭に表現されている (Preface)と著者が考えたからであろう。彼の意図は、古典経済学から近代理論への移行行きを哲学的に検討すること、すなわち現実主義的であると同時に理想主義的でもある学説から純粹に現実主義的な理論への経済学の発展は、得たものと共に失ったものが、進化と共に退化が、豊富化と共に貧窮化であったことを示唆することに

ある。真理の探究を善の探究から切り離すべきではない、人間的な思索という偉大な使命は、この両方の仕事成しとげられる時初めて果される (Postscript) という言葉は、彼の立場をわれわれに示す。それはまさに "Cambridge spirit of economics" —— 社会学と経済分析との間には決して断ち切れない堅いつながりがあるというマーシャル的信念——以上でも以下でもない。すなわちそれは、最近の経済学の純粹に技術的な傾向に対する一つの批判ではあるが、このような傾向を全面的に克服するような別の立場からするものではなく、近代経済学の内部において、失われた価値を求めて理想主義と実証主義を折衷するという意味において。

二

スタークは、古典経済学は中世解体後の新しい宇宙論の不可欠な一部であり、ケネーとスミスは、ロックとライブニッツに多くのものを負っていると考える。そしてロックの思想の中あらゆる通路は、人間は直接自然の前に立ち、自由に自然に接近できねばならない

という原理に導かれ、そこで主観的価値と客観的価値とが一致し、個人の幸福と個人の努力とが符合するとした。そしてロック哲学の中にあるこの社会的調和の理論は、ライブニッツによって更に展開された(モノアド論)。このようなものが、彼によれば古典派経済学の哲学である。そこでは自由と平等が一致し、経済学は現実主義であるとともに理想主義的であった。だが、産業革命は様相を一変させた。一八二五年に、経済学者たちは経済的自由と社会的平等(社会主義)というおそろしい二者択一に直面する——古典派経済学の終末——。そして二つの路線をそれぞれ代表するものとして、彼はリカードゥ派社会主義者として著名なT・ホジスキンとW・トムソンを分析の対象としている。

ホジスキンの学説が、ケネー、スミスの基本観念と同じく自然法の流れの中にあることは誰しも認めるところであろう。スタークはこれを特に強調し、ロックの自然法実践哲学の根本にあった真理、すなわち、人間は自然に依存し、自然は人間に服従するということから、ホジスキンの労働価値説、さらに労働所有権説(全労働収益権説)を演繹している。だがスタークの分析においては、ロック、スミス——ホジスキンが直接的に結び付けられて、何故一八二〇年代に、つまりリカードゥによってスミス経済学の自然法的色彩が拭い去られ、功利主義に基いて古典派経済学が完成した後の段階にお

いて、ベンサムによって否定されたはずの自然法思想がホジスキンの体系の中で特に復活したか、ということとは明らかではない。この自然法の復活は、ベンサムイズムのムードに対する批判、ブルジョア急進主義からの脱却、労働者の側に立っての資本の物本性攻撃、資本主義体制に対するより直接的な対決であり、従ってリカードゥ派社会主義者達の中でもホジスキンが労働運動に対して最も大きな貢献を与えたのであるが、経済学と社会思想と労働運動が結び付くというこの時代の特殊な意味までも、スタークにおいてはロックの自然観の中に呑み込まれてしまう。ホジスキンはベンサムの直接の弟子(訳七八頁)ではない(所有権の法的基礎に対するホジスキンの批判をみよ)し、古典派経済学の内部において自由と平等の岐路に立ったのではなくて、ロックの自然法に全労働収益権説に依ることによって、資本に対して労働を擁護し、始めから古典派経済学に対する批判、解体の方向を形成していたのである。

スタークは、ホジスキンに及ぼしたサン・シモンの影響を強調することによって、新しい解釈を加えた。すなわち、実定法がなぜ神の法から非常にはなれてしまったかという問に対して、ホジスキンが自然状態を破壊した野蛮人の侵略を挙げ、資本家や地主をその子孫として説明したことの中にサン・シモンを見出したのである。彼は、ホジスキンの名が保たれたのはE. Halévy; Thomas Hodgskin, 1903. だけ(alone)によると考えた(Marx, Foxwell, Lowenthal, Koepf, Schütze, Driver, Cole, などの評価は?)。

けれども、この著者はホジスキンの三つの著作 *The World Belief Defined and Explained*, 1827; *On Free Trade and Corn Laws*, 1843; *A Letter on Free Trade and Slavery*, 1848. を知らなかった点で不完全であり(訳二一九頁、*The World Belief* は一九五六年の英訳においてA. J. Taylorによって補足されている)、サン・シモンの決定的な影響に気付かなかったことに大きな欠点があるとした(訳二一九頁)。そしてこれはホジスキンに対する分析が不十分であったことではなく、サン・シモンを全く誤解したことに帰因すると考えて、別の論文において、サン・シモンの著作が本質的に自由主義的な性格であることの論証を試みている (*Saint-Simon as a realist.*—*Jl. of Ec. Hist.*, May 1943; *The realism of Saint-Simon's spiritual program.*—*Jl. of Ec. Hist.*, May 1945)。サン・シモンを社会主義者と見ることに対する反論は古くからあるので、ここではその当否はさておき、彼がホジスキンの師 (Haster) であるというのは、興味のある新説であるが、この書では類推のみでその論証を欠く。

このようにサン・シモンを自由主義者とすることによってホジスキンの系列の上に載せるとするならば、それ以上の権利をもって、ゴドウィンが登場するのではないだろうか? 誰しも認めるようにホジスキンの体系は無政府主義的色彩によって貫ぬかれている。富の基礎を労働に求め、分業の労働者に及ぼした悪しき結果を批判するという考えがゴドウィンによって先鞭をつけられている(拙稿「ウ

ィリアム・ゴドウィンの生涯と思想——特に『Enquirer』を中心に——」(『経済学年報』4参照)というだけでなく、あらゆる法律は所有階級が無産者を服従させその生産物を奪うためのものだという指摘や、「すべて……一般的な取り締まりというものは、表面どれば賢明に見えようとも、財産をどうするかというこの決定に影響せずにおかないようなあらゆる状況を判断する上で、個人の英知には及びもつかないものであるし、また個人の英知が失敗するかもしれないような時にも、それにとっかわることができない。」(『Travels in the North of Germany, 1820, I, p. 262.) というような表現は、まさしくゴドウィンの個人的判断の賞揚を想起させるものがある。アレヴィによると、ホジスキンは *An Essay on Naval Discipline*, 1813. において自分をロック、ペイリ、マルサスの弟子としたが、本有観念の敵対者、功利主義者、個人主義者という意味でその時すでにゴドウィンの影響下にあり(英訳 p. 31)、『Travels』における代議制批判において明らかにゴドウィンの教説を採用し(p. 44)、ベンサム——J・ミルの議会民主主義に対して、政府のない社会というゴドウィンの教説を再生(p. 56)した。このようにして彼はベンサムの体系における *natural identity of interests* と *artificial identity of interests* の対立において、前者に一貫したゴドウィンの系列の上にホジスキンを位置づけている(p. 168)。ホジスキン自身がどの程度直接にゴドウィンの書を読んでいるかはわからないけれども、その中に一貫して流れる無政府主義——政府

による教育の否定 (Mechanic's Magazine, Oct. 11, 1823) から政府による共産主義の批判 (The Natural and Artificial Right of Property, 1832) さらには共産主義者や社会主義者や組合による労資関係への介入否認 (The Economist, 1854) などに至るまで

——は、明らかにゴドウィンの直接の影響、または少なくともゴドウィンの雰囲気の影響と考へなければならぬ。その背後には、もちろん当時の独立小生産者の個人主義という共通の基盤がある。で、平等主義的自由主義者として出発したホジスキンは、後に単なる自由主義者となり、最後には階級社会と妥協する (What shall We Do with our Criminals? 1857) というみちすじも、ゴドウィンと一脈通じるものを感じさせる。ゴドウィンの体系は、個人主義Ⅱ無政府主義と、私有財産批判Ⅱ共産主義の二面を含み、ホジスキンはこの双方をそれぞれ特有な方法で受けついでたことについては以前に指摘した (白井厚、野地洋行「トマス・ホジスキンの『労働擁護論』——その自然法思想と経済学について——」三田学会雑誌「五一巻九号」)。ゴドウィンがホジスキンに与えた決定的な影響に気づかなかつたことは、ホジスキンに関するスタークの論考の大きな欠点である。この欠陥は、ホジスキンの分析が不十分であったことではなく、彼をあまりにも完全にロックの哲学の中に押し込めてしまったことに帰因するだろう。

国家の活動を否定した場合、理想とする社会の回復をホジスキンはその発展説に求めた。すなわち、歴史は未開の狩猟時代→放牧時

代→農業時代と進歩した (Right of Property) が、野蛮人の侵略は人為的な所有権の社会をもたらし、社会の調和的發展を止めてしまった。だが法律の障害にもかかわらず、人口の増大によって進歩は進む。そこで、

「法律づくりの貪慾と野望はくだかれてしまった。それは、自然法の恵み深い働きによってくだかれてしまった。これらの言葉は、後にカール・マルクスによって古典的に展開された唯物史観の基本概念を含んでいるように思える。というのは、ホジスキンは云おうとするのは次のようなことだから。社会の社会的、経済的構造は変化した。そこで法律的上部構造は、結局それに対応する変形を必然的に蒙らなければならなかった。立法は自由ではない。それは時代の、すなわち変化する時代の、さし迫った必要に従わねばならない。」 (The Ideal Foundation, pp. 93-4)

このようにして、スタークはホジスキンの発展の理論をマルクスに結び付けようとする。ホジスキンの発展説は、啓蒙思想の進歩観とも異なるので、これは非常に示唆に富んだ説であるけれども、ここでは、自然法思想はまだ唯物論として成熟していないこと、経済構造の内部における弁証法が把握されていないこと、歴史における階級の主体性が全く理解されていないこと、個人が社会によって形成され、法律が財産関係に支配されるという考えは、すでに啓蒙思想——ゴドウィンの中に見出されること、を指摘するにとどめよう。

## 三

トムスンに関するスタークのヴィジョンは、彼もホジスキンと同じように、ロックの流れの中にあつて、労働のみが富をかたちづく、資本は何も生産せぬと考へ、従つて労働にもとづく所有を理想としたが、ホジスキンと異なつてレセ・フェールの原理を信用せず、自由を捨てて平等の道を取るに至つた、ということにある。実際、トムスンの「分配論」は、ホジスキンの書が自由に対する形而上学的な信仰を示しているのに対して、自由と平等の苦しげなかつた、を現わす。そして、自由な労働、生産物の完全使用、自発的交換という分配の自然法則によつて得た平等な安全 (equal security) においても、自由競争の害悪を教え挙げ、オウエン流の協同主義へと進んだのである。

だが、このような両者の差異は、産業革命によつて決定的な選択を迫られた自由と平等の矛盾を、全面的に表現しているのだろうか？ いいかえれば、スタークの云うように、トムスンの集産主義はマルクスに再現するという性質のものであるのか？

産業革命によつて決定的な矛盾に立ち至つたものは、自由と平等の単なる理念ではなくて、ブルジョアジーの自由と、プロレタリアートの平等の理想であつた。もちろん、これが完全な両極分解に達する前には、この対立は中間存在の小生産者の雰囲気の中で醸成し、ホジスキんとトムスンというかたちで発芽したということは認めら

れる。けれども、これはあくまで小生産者のな粹の中でという限定を必要とするのである。

トムスンは、ホジスキンとはちがつて、熱烈なベンサム主義者として出発した。つまり、ひとしくロックの影響下にあるとは云つても、ホジスキンが直接に自然法を受けついたのでに対し、彼はこれを功利主義として受け容れている。(この意味で、彼の Law of nature は自然法ではなく、自然法則と訳した方が適當であろう。) 彼は、全労働取益権説と協同主義をもつて、資本に対抗したけれども、結局はベンサムの改良主義の濃霧に包まれて、小ブルジョア的な要求と批判の域を出なかつた。その階級的な立場はホジスキンと似ており、ここでも小生産者の資本主義批判の先駆者ゴドウィンの影響を強く受けている(これについても「三田学会雑誌」五一巻二号の拙稿参照。彼の自発的平等、利己心の否定なども明らかにゴドウィンの。ただし、ゴドウィン、トムスン、ホジスキンがひとしく小生産者のとはいつても、必ずしも同じ層を代表しているわけではないので、さらにくわしい分析を必要とする)。彼の協同組合思想は、オウエンより進んでいるとしても、またどれほど強く平等を主張したとしても、労働運動の結果ではなく、プロレタリアートによる生産手段の社会化とは意味をことにして、自由な小生産者の、自分の生産物の安全を目標とした、自発的な結合に過ぎない。彼は資本の物神性に対する批判においても、労働運動への貢献においても、むしろホジスキンに一步を譲っているので、これを単に平等主

義としてとらえると、どちらかといえばプロレタリアに近いホジスキンの自由を撰び、ブルジョアの色彩の濃いトムスンが平等—社会主義のみちを撰んだという奇妙な結果となってしまふ。

ホジスキんとトムスンに関する詳しい分析の結論に、スタークは「自由と平等は、いぜんとして人類の白昼夢であった。それは、多少変更されたとはいえ、ホジスキンの発展説とトムスンの集産主義的ユートピアとの総合を思想体系とした、カール・マルクスにおいて再現した」

という言葉を添えた。ロックからの長いみちゆきは、このあとゴッセンとジェニングズに引き継がれるのであるが、この検討は他日に譲ることにして、ここでは、ホジスキンの発展説と唯物史観とは質的に異なり、トムスンの集産主義もプロレタリア社会主義ではないこと、——つまり両者の単なる延長の上にはマルクス主義は出現しない、ということ云い添えておこう。古典学派解体期を論ずるためには、広大な未開拓の分野が拡がっている。

(東洋経済新報社刊・A5・四〇〇頁・六五〇円)

(白井 厚)

ンが、十八世紀自然法思想家の合理論に対して、経験論的な歴史観をもっていた、というだけでは、サン・シモンとマルクスの間の距離も、接近点も、何も明らかにはされていない。そこで彼の歴史観の基本的性格を知るため、参考資料として右にあげた二つの論文をとりあげつつ、若干の考察を試みたい。

この二つの論文を並べると、W・M・シモンの研究が、サミュエル・ベルンシュタインのそれに比べて遙かに本格的であり、すぐれてもいるのだが、優劣を判定するのがここでの目的ではないので、サン・シモンの歴史観を取り上げる場合の、二人の態度、とりあげ方を検討してみよう。ベルンシュタインの立場は次の点に要約されている。「夢のような思弁の国でのサン・シモンの遊歴などではなくて、彼の歴史哲学こそが、後の社会主義思想家の靈感の源となったのである。」(p. 100)そしてこの場合、ベルンシュタインが強調するサン・シモンの歴史哲学とは、第一に、歴史の発展における経済的要因と階級関係の重視であり、第二には、歴史発展における非直線的性格——組織の時代と危機の時代の交互交代——の発見とである。このような歴史観こそ、後の社会主義へのサン・シモンの最大の遺産であったという主張は、すでに明らかかなように、サン・シモンの歴史哲学の中に唯物史観を見、空想から科学への発展を結ぶ絆を、そこに見出そうとするものである。だが、普通には、マルクス・エンゲルスがその唯物史観を形成したのは、主としてドイツ古典哲学の路線上においてであるとされている。もちろん、マルクス

書 評

『サン・シモンの歴史観に関する』

二つの論文——研究資料として——

Walter M. Simon; History for Utopia: Saint-Simon and the Idea of Progress, Journal of the History of Ideas, Vol. XVII, No. 3, 1956, pp. 311—331.  
Samuel Bernstein; Saint-Simons Philosophy of History, Essays in Political and Intellectual History, 1955.

一

われわれがサン・シモンを研究対象とするのは、もちろん、空想的社会主義がいわゆる科学的社会主義に何を遺産として残したか、という観点においてである。そしてこの場合、彼の歴史観が一つの重要な討議対象となる。十八世紀啓蒙の思想家達が、社会の改革を要求する場合、進歩の名によってではなく、非歴史的な「自然」の名によって、抽象的な「理性」の名によってしたの比べれば、サン・シモンの歴史観は、少なくとも、一つの発展的な歴史観をもっている、という点だけからしてさえも、遙かにマルクス・エンゲルスの唯物史観に近づいているのはいうまでもない。エンゲルスが「反デューリング論」や「自然弁証法」において、彼をヘーゲルに比しているのは、この点からみても理由がある。だが、サン・シモ

が、哲学的唯物論を、社会観、歴史観としての唯物史観へと展開させた場合に、サン・シモン・フリーエのフランス社会主義からうけた影響は再検討される余地が十分あるとしても、歴史哲学としての弁証法や唯物論は、やはり、ドイツ古典哲学から得たものと考えるべきであろう。

こうしてみると、サン・シモンの歴史観は、はたしてベルンシュタインがいうように、後の社会主義との最大の連結点であるのかどうか、それは彼が主張するほど専ら唯物史観的であるのかどうか、再び検討されねばならなくなる。(この場合、ベルンシュタインの「社会主義」とはマルクシズムを意味すると考えて差支えない。なぜならすべての社会主義が唯物史観を奉ずる訳ではないから)。

答えはこうである。彼の歴史観は極めて多くの成果を遺している。だが、一般に知られているように、サン・シモンの歴史哲学は二元論的であり、唯物史観的な面と等しく観念論的な面を多分にもっているものであり、むしろ、歴史観におけるこの二元論こそが、彼を空想的社会主義者たらしめているとさえいえることができる。彼の歴史観は無論大きな成果をもってはいえ、歴史哲学それ自体としては空想と科学を結ぶものではなくして逆に分つものである。それを結ぶものは、もっと別な所にある。

このサン・シモンの歴史哲学の二元的性格を十分に、かつ思想史的考慮をもちつつ指摘したのが、ウォルター・M・シモンの論文で